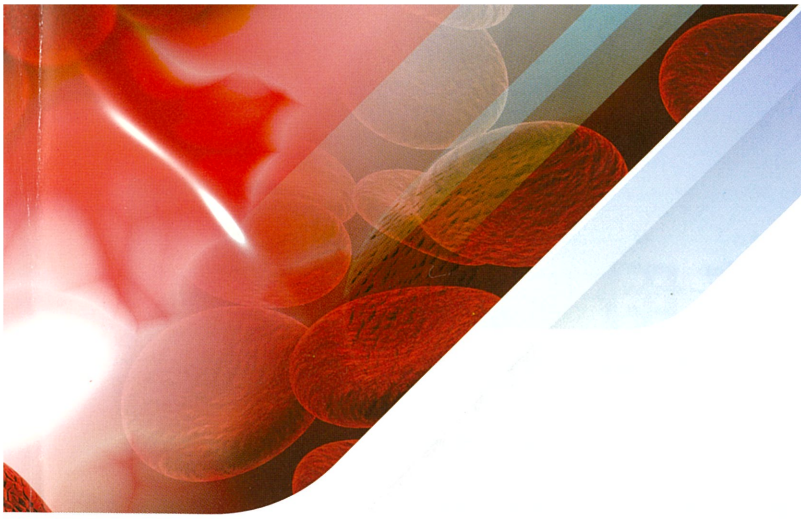

平成30年度

Tohoku University School of Medicine

東北大学大学院 医学系研究科・医学部

退職教授最終講義

平成31年2月8日［金］

医学部百周年開設記念ホール
星陵オーディトリアム 講堂

東北大学医学部
東北大学大学院医学系研究科
東北医学会

木村（きむら） 芳孝（よしたか） 教授

◆ 融合医工学分野

講義題目

胎児心拍モニタリングの意味を追いもとめて

略歴

昭和63年３月　東北大学医学部卒業
昭和63年６月　東北大学医学部附属病院研修医
昭和63年７月　釜石市民病院
平成３年８月　東北大学医学部附属病院
平成６年４月　東北大学医学部附属病院助手
平成９年４月　古川市立病院
平成10年５月　東北大学医学部附属病院助手
平成13年５月　東北大学大学院医学系研究科講師
平成14年４月　New York University Medical center (Ob/Gy)助教
平成16年５月　東北大学先進医工学研究機構教授
平成20年４月　東北大学国際高等研究教育機構 国際高等融合領域研究所教授
平成24年４月　東北大学大学院医学系研究科教授 東北大学大学院医工学研究科教授（兼務）
平成31年３月　退職

木村芳孝教授は東北大学医学部を卒業され、東北大学産婦人科に入局、矢嶋　聰教授、岡村州博教授の指導を受けられました。昭和63年から初期研修として釜石市民病院に勤務され、赴任当時まだ製鉄所があった時で年間700件の分娩と350件の手術を医師2人で行っておられました。多忙な日々の中、岩手県で初めて腹腔鏡手術施行を経験、顕微手術などを学ばれ、手術の面白さや分娩の後の妊婦さんの笑顔など産婦人科医療の魅力と充実感、楽しさを知るようになり、次第に安全な分娩を行うにはどうしたらよいかを考えるようになりました。平成3年に帰局し、岡村先生の率いる周産期グループに入られました。羊胎仔実験を行い胎児心拍細変動の研究を進めてこられました。そのころオックスフォード大学のドーズは、胎児では心拍細変動は単なるノイズと考えており、その説が世界的に信じられておりました。これに対し、羊の胎仔実験を行い心拍細変動に副交感神経と交感神経の関与にかかわる構造が大人と同じにあることを突き止め博士論文としてまとめられました。この論文は当時生理学誌では最高峰のAmerican Journal of Physiologyに掲載され、胎児心拍変動研究の第一人者Quilligan教授から絶賛されました。また、事情があり行くことができなかったのですが、オックスフォード大学産婦人科から招聘されるきっかけになりました。臨床面では、胎児手術の新たな方法を次々に施行、世界的にも新規性の高かった胎児採血を100例以上担当、この技術を用いて、八重樫伸生先生と一緒にパルボウイルス感染胎児の胎児輸血治療に日本で初めて成功されています。

平成9年から科長研修で古川市立病院に勤務、産科救急診療部門の担い手として活躍されました。平成10年に帰局、平成13年産婦人科講師、また、平成14年にNew York University Medical Centerに助教として留学、胎児心電図の開発の必要性を実感して帰国された後、周産母子センターで臨床を行いながら、平成16年東北大学先進医工学研究機構教授就任、医工連携として胎児心電図装置の開発を開始、新たな情報技術を開発し特許化、企業との産学連携を推し進められました。平成24年現職に就かれ、胎児心電図装置を完成、八重樫先生と臨床治験を行い東北大学では初めてとなる新規医療機械の薬事承認を受けることができました。この功績で文部科学大臣賞を受賞しておられます。

木村教授は、患者さんを一番大切に考え、何があっても真摯に対応することを原点に臨床、研究を行ってこられました。これからの若い人たちの活躍を心から願っておられます。